

[研究ノート]

## L. N. グミリョフのエトノス定義と階梯的民族観

三 栖 大 明

## はじめに

L. N. グミリョフ (1912–1992) はソ連期の歴史学者・民族理論家であり、14年の歳月を強制収容所で過ごした「牢獄の学者」として知られる<sup>(1)</sup>。グミリョフは主に疑似科学を援用することでエトノス (этнос 民族) を生物学的に捉える原初主義者と考えられており、特に熱情性 (пассионарность) に関する彼の主張が注目を集めてきた<sup>(2)</sup>。グミリョフは宇宙線に由来する生物エネルギーの過剰を熱情性と呼び、その影響によって人間集団の中にそれまでとは異なる行動を取る突然変異体が出現し新たなエトノスが発生するとした<sup>(3)</sup>。一方、グミリョフが提起したエトノス定義に見られる彼の民族観や、この定義から派生する形で彼が示したエトノスをヒエラルキー構造として捉える議論 (этническая иерархия 以下、民族階梯論) は必ずしも内在的に吟味されて来たわけではない。本稿ではグミリョフの議論のうち、このエトノス定義と民族階梯論についての分析を行う<sup>(4)</sup>。

従来のグミリョフ研究では、彼の議論の中でも上記の熱情性に関心が向けられてきた。A. S. チトフによれば、グミリョフ理論の中心概念は熱情性であり、熱情性を中心に据えた

- 
- 1 安井亮平「レフ・グミリョーフをめぐるあれこれ」『ロシア史研究』53号、1993年、61頁。グミリョフのバイオグラフィについては、大木昭男「レフ・グミリョーフとユーラシア主義」『ユーラシア研究』31号、2004年、50–52頁。
  - 2 пассионарность は「激情」「熱情」「励起」「パッションナルノスチ」などと訳されるが、本稿では乗松亨平による「熱情性」の訳語を採用する。乗松亨平『『結びつけ』の空間：後期ソ連に於ける構造主義とユーラシア主義』『Slavistika』35号、2020年、379頁。熱情性については、大木「レフ・グミリョーフとユーラシア主義」52–54頁；栗生沢猛夫「補論 Л. Н. グミリョフのエトノス史論とロシア」『タタールのくびき：ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007年、191–202頁；安井「レフ・グミリョーフをめぐるあれこれ」63–64頁。
  - 3 Гумилев Л.Н. Этногенез и биосфера Земли. М., Издательство АСТ, 2019. С. 337–340, 423–425.
  - 4 グミリョフは1960年代後半から独自の民族論を提起していたが、本稿で紹介するグミリョフの議論 (エトノス定義、コンソルトツィヤ・コンヴィクシヤの概念、カレリア人・タタール人の自己認識など) の原型は1967年に発表された論文「〈エトノス〉という用語について」で既に登場している。Гумилев Л.Н. О термине «этнос» // Доклады отделений и комиссий географического общества СССР. 1967. Вып. 3. その点、グミリョフはエトノス理論を発表し始めた当初から本稿で考察する内容を一貫して主張していたと考えられる。他方、「宇宙エネルギーに由来する民族の進化」についてグミリョフは当初から主張していた訳ではなかった。V. A. コレニャコが指摘するように、少なくとも1970–1971年の段階では熱情性に関するグミリョフの議論に宇宙の語は登場しない。Кореняко В.А. К критике концепции Л.Н. Гумилева // Этнографическое обозрение. 2006. №3. С. 25.

民族発生論こそがグミリョフの最も重要な業績であるという<sup>5)</sup>。M. パッシンは、熱情性をはじめとするグミリョフのエトノス理論に見られる広義の自然科学的要素の現代ロシアにおける受容に注目している<sup>6)</sup>。こうした傾向はロシアの研究者の間でも広く見られるものである<sup>7)</sup>。特に、当時のソ連でエトノスをテーマとしていた民族学において、グミリョフの立場はエトノスを「生物学的 (биологический)」に捉えるものであるとされ、論敵だったソ連民族学研究所の所長 Iu. V. ブロムレイの「社会的 (социальный)」なエトノス理論と対比される<sup>8)</sup>。ここで言う「生物学的」とは、熱情性の提唱、生物学用語の使用、景観の強調、民族間関係を生態学的に叙述する点など、グミリョフの議論に登場する広義の自然科学的装いを示すものである。ソ連民族学の文脈において、グミリョフの「生物学的」議論は民族的帰属を生物学化し人種主義への道を開くものだと批判されてきた<sup>9)</sup>。

以上のように熱情性を始めとする「生物学的」議論が注目されて来た半面、彼の議論に見られる必ずしも「生物学的」ではない部分にはあまり注意が払われて来なかった。V. シュニレルマンと S. パナーリンによれば、エトノスについてグミリョフが行った説明は相互に矛盾する2つのブロックから構成されているという。第一のブロックは既に紹介した「生物学的」議論であり、エトノスを生物学単位と捉える本質主義と関連しているという。これに対して、第二のブロックはエトノスを「我々一彼ら」の対置から規定し、生物学的分類群や

- 
- 5 Alexander S. Titov, *Lev Gumilev, Ethnogenesis and Eurasianism* (PhD diss., University of London, 2005), pp. 89, 224. 国内では乗松亨平と大木昭男がグミリョフのエトノス理論として熱情性を中心とした民族発生論を紹介している。乗松亨平「ユーラシア主義の歴史的・地域的展開」『ROLES Report』18号、2022年、3頁；大木「レフ・グミリョーフとユーラシア主義」52-54頁。
- 6 Mark Bassin, *The Gumilev Mystique Biopolitics, Eurasianism, and the Construction of Community in Modern Russia* (Ithaca: Cornell University Press, 2016).
- 7 V. I. ザテエフと N. G. ラゴイダは、グミリョフの学問的貢献はエトノスの発展過程を熱情性から説明するエトノス生成論の創出だと述べている。Затеев В.И., Лагойда Н.Г. Лев Николаевич Гумилев как ученый и философ: теория этноса и этногенеза, ее социально-философские аспекты и научные истоки. Улан-Уде, 2000. С. 15. 一方、A. V. ゴロヴニョフや I. セメネンコはロシア民族学を通史的に説明する中でグミリョフを熱情性の提唱者として描いている。Головнев А.В. Этнография в российской академической традиции // Этнография. 2018. №1. С. 30; Irina Semenenko, "Ethnicities, Nationalism and the Politics of Identity: Shaping the Nation in Russia," *Europe-Asia Studies* 67, no. 2 (2015), p. 308. また、Yu. V. アルチュニャンらによれば、グミリョフはエトノスを生物学的現象とする原初主義者であり、彼らはグミリョフの主張として熱情性を紹介している。Арутюнян Ю.В. и др. Этносоциология: Учебное пособие для вузов. М., 1998. С. 33.
- 8 そのような分類の事例としては、Арутюнян Ю.В. и др. Этносоциология. С. 32-33; Маибуц Я.Г., Чистов К.В. Ещё раз к вопросу о двух концепциях «этноса» (По поводу статьи К.П. Иванова) // Лев Гумилев: pro et contra / Под ред. Г.А. Бордовского, В.Н. Кичеджи, В.П. Соломина, Д.К. Бурлаки. СПб., 2012; Соколовский С.В. Жизнь после жизни, или о концепциях этноса и этничности в российских социальных науках // Этнографическое обозрение. 2022. №6. С. 114; 井上紘一、内堀基光、川田順造、黒田悦子、松原正毅「民族学からみた民族 (共同討議)」岡正雄、江上波夫、井上幸治編『民族とは何か (民族の世界史1)』山川出版社、1991年、199頁；田中克彦『言語からみた民族と国家』岩波現代文庫、2001年、271頁。
- 9 ソ連時代におけるそうしたグミリョフ批判としては、Периц А.И., Покишиевский В.В. Ипостаси этноса // Природа. 1978. № 12; Заключение комиссии Отделения истории АН СССР о работах Л.Н. Гумилева по историко-этнической проблематике // Источник. 1995. №5.

個体群ではないと規定する諸言説を指す。加えてシュニレルマンらは、ゴミリョフが歴史的・政治的状况によって民族的帰属が変化する事例に通暁していた一方で民族を自然現象と見做した点など、彼の民族理解に見られる矛盾点を指摘している<sup>(10)</sup>。シュニレルマンらは以上の矛盾に代表されるゴミリョフの方法論上の問題や彼の歴史叙述がもたらす政治的影響を指摘する一方、必ずしも彼の民族論をそれ以上内在的に吟味している訳ではない。

本稿では、むしろ、シュニレルマンとパナーリンが指摘した「第二のブロック」に焦点を当てることを通して、ゴミリョフの言説を分析する際に熱情性などを強調してきた従来の研究では注目されてこなかった彼の民族観とそれが果たす理論上の諸機能を明らかにする。具体的には、ゴミリョフが提示したエトノス定義とこの定義から派生する形でゴミリョフが展開した民族階梯論を分析する。ゴミリョフはエトノスをヒエラルキー状のものと捉えており、下からコンソルツィヤ (консорция)、コンヴィクシヤ (конвиксия)、サブエトノス (субэтнос)、エトノス、スーパーエトノス (суперэтнос) に至る構造が存在すると述べている<sup>(11)</sup>。エトノス定義を中心に彼の議論を分析することによって、ゴミリョフが特定の文化的・身体的その他の特徴に基づくエトノス定義を否定しており、行動規範の差異を通して現れる「我々一彼ら」の区別を中心に据えた民族論を提起していたことが明らかになるだろう。ゴミリョフはこのエトノス定義の延長上で多様な集団をエトノスと分類し、民族的帰属を階梯的なものと捉えていた。

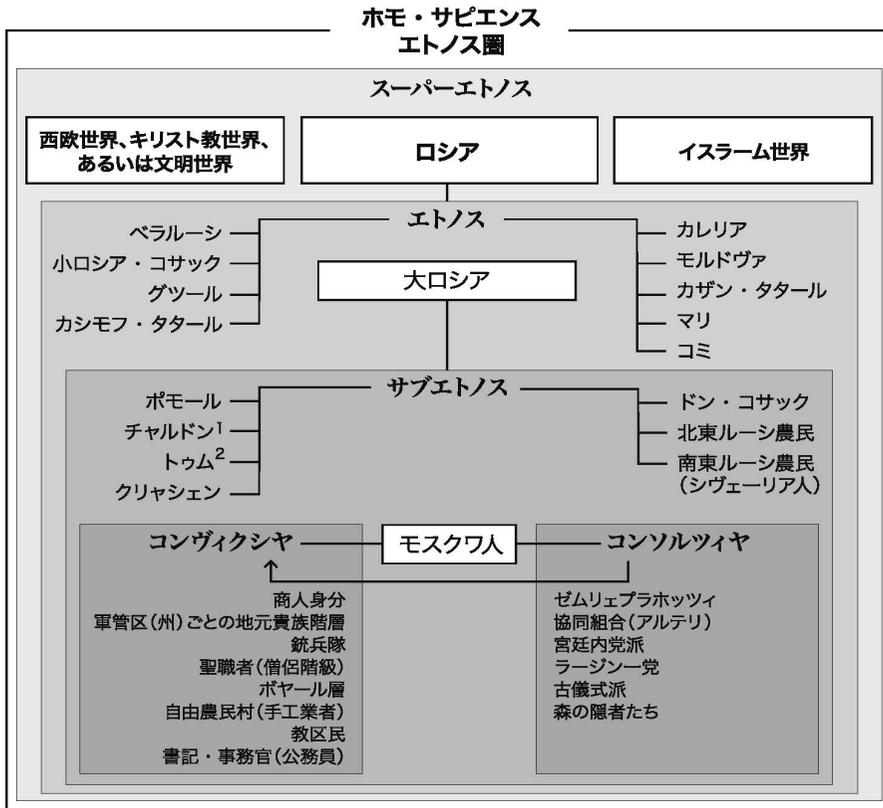
本稿では以下の通りに議論を進める。まず第一節で主著『エトノス生成と地球の生物圏 (Этногенез и биосфера Земли)』の記述を中心にゴミリョフによるエトノス定義を概観し、第二節では「行動のステレオタイプ」に関する叙述から、彼がエトノス同士の境界を捉える際に行動規範の差異を重視していたことを明らかにする。第三節ではゴミリョフがエトノス定義から特定の文化的・身体的指標を除外している点に注目すると同時に、彼のエトノス定義を S. M. シロコゴロフのものと比較することで、ゴミリョフの特殊な民族理解を明らかにする。第四節では民族階梯論の下位構造について分析し、信仰集団や身分を始めとする小規模な集団がしばしば民族の原型と成り得るとゴミリョフが考えていたことを明らかに

10 Viktor Shnirelman and Sergei Panarin, "Lev Gumilev: His Pretensions as Founder of Ethnology and his Eurasian Theories," *Inner Asia* 3, no. 1 (2001), pp. 6–7.

11 例えば、ゴミリョフはロシア・スーパーエトノス (российский суперэтнос) を民族的ロシア人 (русский) を中心に複数のエトノス・サブエトノスが共存するモデルとして描いている。Гумилев Л.Н. Конец и вновь начало. М., Издательство АСТ, 2018. С. 57. またゴミリョフは、複数のスーパーエトノスが集合し他の集団に自己を対置するハイパーエトノスの統一体 (гиперэтническая целостность) も存在し得ると述べている。Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 147. ゴミリョフは当初 консорция と конвиксия をラテン語で consortium (consortia), convixium (convixia) と表記しており、これらの表現は生物学用語の「consortium」に由来すると考えられる。「consortium」とは「2種あるいはそれ以上の共生の一種で、すべての種が互いに利益を得る状態」を指す。エレノア・ローレンス編 (生物学用語辞典編集委員会訳) 『ヘンダーソン生物学用語辞典』オーム社、2012年、144頁。ただし、ゴミリョフの記述における実際の用法に照らした際、これらの用語に正確に対応する表現が存在しないため、本稿では暫定的にそれぞれ片仮名でコンソルツィヤ、コンヴィクシヤと表記する。サブエトノス、エトノス、スーパーエトノスについては、それぞれ「亜民族」「民族」「超民族」と訳すことが可能と考えられるが、類語であるナーツィヤ、ナロードノスチなどとの混同を避けるため、本稿ではロシア語からの音写を用いる。

する。最後に、第五節では民族階梯論の上位構造たるスーパーエトノスについての記述から、グミリョフが文明圏や帝国といったマクロな集団に民族的性質を付与したロジックを明らかにする。

### 近世ロシアのエトノス・ヒエラルキー構造



1 シベリア出身者への俗称  
2 チュルク系ムスリム男性とルシン系キリシタン女性の子孫

出典：Гумилев. Конец и вновь начало. С. 57. の図をもとに著者作成

## 1. グミリョフによるエトノス定義

『エトノス生成と地球の生物圏』の中で、グミリョフはエトノスを次の様に定義している。

エトノスとは、安定的で自然に形成された人間集団であり、その成員は自身を他の類比的な集団全てに対置し、歴史的・時間の中で規則的に変化する独自の行動のステレオタイプによって区別される<sup>(12)</sup>。

12 «Этнос—устойчивый, естественно сложившийся коллектив людей, противопоставляющих себя всем

この定義に見られる「自然に形成された」「自身を他の集団に対置する」「行動のステレオタイプによって区別される」という三要素はこれが書かれた70年代のみならず晩年に書かれた定義でも変わらず採用されており<sup>(13)</sup>、この3点こそグミリョフのエトノス定義にとって必要な要素だと考えられる。

このうち、「自然に形成された」という部分はエトノスを自然現象として捉えようとするグミリョフの立場と直接結びついた「生物学的」要素だと言える。これに対して、「自身を他の集団に対置する」（以下、彼我の対置）と「行動のステレオタイプによって区別される」という箇所は、自然科学的に措定される原初主義とは異なるアプローチにも根差すものである。例えば、グミリョフは「行動のステレオタイプ」の世代間継承メカニズムを信号継承(сигнальная наследственность)と呼んでおり、このために「行動のステレオタイプ」言説はエトノスを遺伝学的範疇として説明するものと捉えられてきた。一方、後述するように、「行動のステレオタイプ」は単に共同体に固有な行動規範を指しており、グミリョフによれば人文学において伝統や社会的相互関係と呼ばれるものだという<sup>(14)</sup>。この事例に見られるように、グミリョフは必ずしも「生物学的」とは限らない内容を持つ概念を自然現象として説明する傾向があった。

本節では、「行動のステレオタイプ」や「彼我の対置」に対してグミリョフが行った以上のような「生物学的」説明にではなく、これらの概念の内容に関する記述に見られる「第二のブロック」に注目する。具体的には、①特定の文化的・身体的指標に基づくエトノス定義の否定、②彼我の対置の強調、③行動のステレオタイプに基づく民族理解、の三点に注目することで、グミリョフが上記のエトノス定義を導き出した過程を追う。この分析からは、行動規範の差異を通して観察される「我々—彼ら」の対置からグミリョフが民族集団を捉えていたことが明らかとなるだろう。

上記の定義を導出するに際して、グミリョフは何らかの指標(индикатор)を基にエトノスを定義する諸言説を吟味している。まず言語について、あるエトノスと別のエトノスを区別する「我々—彼ら」という対置を生む原因として十分な要件ではないとグミリョフは

---

прочим аналогичным коллективам, и отличающийся своеобразным стереотипом поведения, который закономерно меняется в историческом времени». Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 169.

- 13 1992年に出版された著作において、グミリョフは次のようにエトノスを定義している。「エトノスとは、独自の行動のステレオタイプを基礎に自然に形成された人間集団であり、相補性の感覚に基づいて自身を他の同様のシステムと対置するシステムとして存在する」。«Этнос — естественнo сложившийся на основе оригинального стереотипа поведения коллектив людей, существующий как система, которая противопоставляет себя другим подобным системам, исходя из ощущения комплиментарности». Гумилев Л.Н. От Руси к России. М., Издательство АСТ, 2019. С. 505. この定義では相補性(комплиментарность)という要素が付け加えられている。グミリョフは相補性を「個々人の無意識的な相互的共感(反感)の感情で、〈我々の〉と〈他者の〉の区別を規定する」と定義している。Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 694. この概念はアメリカの生物学者L. ベルタランフィに触発されてグミリョフが考案したもので、彼の議論に見られる広義の「生物学的」言説に分類される。相補性については、Гумилев. Конец и вновь начало. С. 64-72. ベルタランフィの学説については、ルドヴィク・フォン・ベルタランフィ(長野敬、飯島衛訳)『生命 有機体論の考察』みすず書房、1974年。

- 14 Гумилев Л.Н. Этногенез и этносфера // Природа. 1970. №1. С. 50.

結論づけている。何故なら、多言語を使用するエトノスが存在し、また逆に複数のエトノスが同一言語を話す場合もみられるからである。一例として、アイルランド人が英語話者である一方、彼らはイングランド人にはならなかったという例をグミリョフは挙げている<sup>(15)</sup>。

言語的な統一性がないにもかかわらずエトノスが機能する例として、グミリョフは「オスマン人のエトノス(этнос османов)」を挙げている。グミリョフによれば、多言語状態にあったオスマン人の場合、言語ではなく宗教(イスラーム)が集団を規定する指標となっていた<sup>(16)</sup>。しかし、だからといって宗教が常にエトノスの一体性を形成するとは限らない。この点についてグミリョフは、バルカン半島の諸民族やキエフ・ルーシがビザンツ人と同じギリシア正教を受容したにもかかわらずエトノスとしては別個のものであることを挙げている。グミリョフによれば、宗教や文化はしばしばエトノスを規定する指標となるが必須のものではないという<sup>(17)</sup>。

また、グミリョフは人種や個体群(популяция)のような生物学的範疇とエトノスを同一視することにも反対している<sup>(18)</sup>。ここでいう人種(раса)とは皮膚の色や頭髮の質、体格などといった形質人類学的特徴によって区別される単位を指す。グミリョフによれば、エトノスは多くの場合多様な人種的特徴を持つ人々から成り立っている。例えば、グミリョフによれば日本エトノスはポリネシア系、アイヌ系、大陸系など多様な人種の特徴を持つ人々の混合であるという<sup>(19)</sup>。ただし、人種に関する同様の指摘はソ連民族学の重鎮 S. A. トカレフも述べるところであり、必ずしもグミリョフにのみ固有な見解ではない<sup>(20)</sup>。

加えてグミリョフは集団の起源の共通性を神話に過ぎないとしてエトノスを規定する指標から外している<sup>(21)</sup>。このように、グミリョフは言語、(宗教を含む)文化、個体群、人種の特徴、起源の共通性といった特定の文化的・身体的な特徴からエトノスを固定的に規定する立場を斥けている。グミリョフによれば、環境の変化によってエトノスを規定する指標は変化し、時に新たな指標を形成したり新たなエトノスのバリエーションを生み出したりするという<sup>(22)</sup>。

---

15 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 56. またグミリョフはヴェブス人やウドムルト人、カレリア人、チュヴァシ人が今日まで家庭では自身の言語で話し、学校ではロシア語で勉強し、しかも故郷を離れば実質的にロシア人と違いがないということを指摘し、母語の知識は必ずしも彼らを混乱させるものではないと述べている。Там же. С. 57.

16 Там же. С. 58.

17 Там же.

18 Там же. С. 63.

19 Там же. С. 66–67, 185.

20 トカレフは次のように述べている。「人種というものは、民族共同体、言語、文化のタイプとも一致するものではない。あれこれの民族の中に、さまざまな人種のタイプがある」。また逆に「同一の人種の特徴を持つ人が、全く違った、さまざまな言語を話し、さまざまな国家に属し、その文化にも違いがあるということになる」。エス・ア・トーカレフ編著(大木伸一訳)『ソビエト民族学入門』弘文堂、1970年、56頁。

21 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 68.

22 Там же. С. 70.

エトノスを規定する指標に関する以上の論点から、グミリョフは次のように述べる。

私たちに知られている全てのケースに該当するエトノスを規定する真の特徴は一つもない。言語、起源、慣習、物質文化、イデオロギーはしばしば規定要素となるが、しばしばならない。唯一のものは「我々はこういうもので、他の全ては異なる」という各人の認知である<sup>(23)</sup>。

グミリョフは言語や文化を始めとする指標がエトノスを規定するのに常に十分な条件であるとは認めず、これらを定義から除外している。他方、「我々はこういうもので、他の全ては異なる」という「我々—彼ら」の対置 (противопоставление) は全てのエトノスに観察されると考え、ここから「他の類比的な集団全てに自己を対置する (противопоставляющих себя всем прочим аналогичным коллективам)」という定義を導き出している。

エトノスを定義するに当たって、グミリョフはまず言語や文化などの要素のうちいずれによって「我々—彼ら」の境界が形成されるのかを問うところから論を起こしていた<sup>(24)</sup>。しかし、上述の結論から見るなら、グミリョフは文化的・身体的その他の差異によって彼我の対置が形成されると考えていたのではなく、「我々—彼ら」が対置される状況を前提としてエトノスを捉えていたと言える。つまりグミリョフは、後述するように、特定の行動規範の通用する範囲と対応する形で彼我の境界が形成されると考えており、この対置を前提としてその時々状況や環境に則した形で言語、文化、人種などの指標がエトノスを規定する特徴として選択されると考えたのである。

このため、グミリョフの議論においては、「我々—彼ら」が対置される状況が変化すると、同一人物でも自己規定が変化するという現象が生じる。この点についてグミリョフはロシアに住む少数民族の事例を紹介している。例えば、トヴェーリ州出身のカレリア人は、自分の村ではカレリア人を名乗るが、勉学のためモスクワに出るとロシア人を名乗るとグミリョフは述べている。何故なら、カレリア人とロシア人の対置は地方では意味を持つ一方で都市では持たないからである。他方、グミリョフによれば、タタール人の場合は事情が多少異なる。彼らはムスリムであり、カレリア人と比べてロシア人との文化的差異が大きいいため、都市においてもタタール人を自称し続ける。ただ、そんな彼らも西ヨーロッパや中国に來るとロシア人と見做され、自分自身そのことに納得する。そして、ニューギニアにでも行けば、単に出身の種族 (племя) がイギリスやオランダではないだけで、自分はヨーロッパ人なのだと感じる<sup>(25)</sup>。グミリョフが挙げる以上のケースでは当事者の民族的帰属は固定的なものではない。むしろ、彼我の対置の状況に応じて呼び名や自己認識、自他を区別する特徴が変化している<sup>(26)</sup>。

23 Там же. С. 114–115.

24 Там же. С. 56.

25 Там же. С. 132.

26 民族アイデンティティが複合的であり状況に応じて変化する現象は旧ソ連地域でしばしば観察される。例えば、ガガウズ系の民族学者 M. N. Губогроは次のように述べたという。「シベリアに移送された時、私と両親はモルドヴァから追放されたガガウズ人だった。モスクワ大学に入学した際には私は自分にとって近しくまた周囲にも理解しやすいブルガリア民族を選んだ。モスクワでの生活と科学アカデミーでの仕事の期間を通して私はロシア人になったし自分をロシア

言語、文化、人種の特徴などの指標の代わりに、エトノスの境界を規定するとグミリョフが考えるのは「行動のステレオタイプ (стереотип поведения)」である<sup>(27)</sup>。「行動のステレオタイプ」とは「学習によって子孫に伝えられる、エトノス・システムの構成員たちに特有な規則や行動の基準」を指す<sup>(28)</sup>。グミリョフによれば、「行動のステレオタイプ」はあるエトノス内部で機能する行動規範 (норма поведения) であり、養育や教育を通して次世代に伝わるという。「行動のステレオタイプ」の具体的内容としては、男女関係の在り方、年長者の扱い、芸術対象の認識、思考方法、生活方法、作法、行為、好み、考え方、社会的な相互関係などが挙げられる。グミリョフによれば、あるエトノスの構成員は自分たちの「行動のステレオタイプ」を自然なものだと感じており、当事者には自身の「行動のステレオタイプ」は意識されない。他方、他のエトノスの「行動のステレオタイプ」に触れる時、彼らは驚きや当惑を感じ同胞に他民族の奇行を語るという<sup>(29)</sup>。また、エトノス論を発表し始めた当初、グミリョフは「行動のステレオタイプ」ではなく単に「行動 (поведение)」という表現を使用していた<sup>(30)</sup>。

こうした共同体規範が強力に作用する理由として、それがあつたエトノスの成員にとって唯一自然で価値がありそれ以外の規範全てを彼らは野蛮と考えるからだとしてグミリョフは述べ、ヨーロッパ人がネイティヴ・アメリカ人やアフリカ人、モンゴル人、ロシア人を野蛮人と呼ぶのと同じ資格で英国人を野蛮人と見做せると指摘している。また、グミリョフによれば、行動のステレオタイプは動的であり、物事のやり方や慣習、相互関係上の規則はゆっくりと、またしばしば急速に変化する<sup>(31)</sup>。

行動のステレオタイプの差異は文字通り行動上の差異として現れる。この点を説明する際、グミリョフは「トラムのアネクドート」と呼ばれる譬え話を挙げた。この譬えの中でグミリョフは、まず民族的出自のみが異なる四人の男性 (ロシア人、ドイツ人、タタール人、ジョージア人) が同じ路面電車で居合わせたとして仮定する。この四人は人種的には皆コーカソイドであり、皆ロシア語を話し、同じ服装をし、同じ食堂で食べ、同じ新聞を抱えている。

---

人だと考えている。しかし休暇や調査でガガウズに行くとき再びガガウズ人になる」。Тшиков В.А. О примирении конструктивизма и примордиализма (оммаж народоведу Андрею Владимировичу Головнёву) // Этнография. 2023. №1. С. 21.

27 例えば、グミリョフはフランスのカトリックとユグノーが「行動のステレオタイプ」によって分かれていたとした上で、「行動のステレオタイプ」は民族的分割の基礎になると述べている。Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 100.

28 «стереотип поведения—специфические правила, стандарты поведения членов этнической системы, передаваемые потомству путем научения». Гумилев. От Руси к России. С. 502.

29 Гумилев. Этногенез и этносфера. С. 49–50; Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 20. また、グミリョフは新生児を除いてエトノスの外にある人間は存在しないと述べている。Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 184. このことは彼が、あるエトノスの行動規範が通用しない存在として、他民族と並んで新生児を想定していたことを示唆している。グミリョフは「行動のステレオタイプ」が養育を通して伝わりと述べているが、幼児に行動規範を教えなければならないという点からは、その習得が後天的なものであることが窺える。その点で、グミリョフは民族的帰属を必ずしも生まれ持った性質とは捉えていなかったと言える。

30 Гумилев. О термине «этнос». С. 14–16.

31 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 113.

ここに暴漢が乗り込み、乗り合わせた女性客に不適切な態度を取ると、一見すると変わらない四人はそれぞれ異なる反応を見せるとグミリョフは述べる。まず、ロシア人は声をかけ、ドイツ人は警察を呼び、タートル人は巻き込まれるのを避け、ジョージア人は男をつまみ出す。生活水準が近い場合は見えにくいものの、このように各エトノス構成員の「行動のステレオタイプ」は大なり小なり異なるとグミリョフは述べている<sup>(32)</sup>。

また、従来の「行動のステレオタイプ」が否定され、新しい規範意識が出現する時、新しいエトノスが誕生するとグミリョフは主張する。グミリョフによれば、新しいエトノスの誕生と新しい「行動のステレオタイプ」の出現は軌を一にしている<sup>(33)</sup>。グミリョフによれば、エトノスは「独自の行動のステレオタイプによって区別される (отличающийся своеобразным стереотипом поведения)」ものである。そこで次節では「行動のステレオタイプ」に関するグミリョフの記述を分析することを通して、彼が言語や文化などの客観的な同質性ではなく行動規範の差異を通して現れる「我々一彼ら」の境界を重視していたことを明らかにする。

## 2. 行動のステレオタイプ

「行動のステレオタイプ」という概念はグミリョフのエトノス定義において他の学者には見られない独自性だと考えられている。ザテエフとラゴイダおよびプロムレイは、主要なソ連の民族学者が主張するエトノスを規定する指標の中で「行動のステレオタイプ」はグミリョフの議論にのみ認められるものとしている<sup>(34)</sup>。また D. G. アンダーソン、S. S. アリイモフ、D. V. アルジュトフは、「行動のステレオタイプ」に関するグミリョフの議論を踏まえ、ロシア民族学に見られる民族観の特徴として行動原型 (behavioural archetype) を挙げている<sup>(35)</sup>。他方、「はじめに」で述べたように、エトノスの発生について、グミリョフは宇宙から飛来する光線エネルギーに由来する熱情性が生物圏を介して人間の神経構造に影響を与え、他の集団とは異なる「行動のステレオタイプ」で動く突然変異体が出現すると説明している。

32 Там же. С. 103–104; Гумилев. Конец и вновь начало. С. 36–37. 1956 年のスターリン批判以降、ソ連ではスターリン的な民族理解が見直され、民族的な固有性よりも階梯的一体性を強調する社会主義的原則への回帰が志向されていた。その過程で社会主義の進展に伴い「諸民族の接近と融合」が進行し、単一のソヴィエト人が誕生すると考えられるようになった。これに対してグミリョフは諸民族融合に反対する立場を取っており、「トラムのアネクドート」は人々が客観的には均質化しても民族的差異は消失しないと主張するものでもあったと考えられる。

33 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 184.

34 Затеев, Лагойда. Лев Николаевич Гумилев как ученый и философ. С. 29; Бромлей Ю.В. К вопросу о сущности этноса // Природа. 1970. №2. С. 52. ただし、プロムレイは「行動のステレオタイプ」を「心理的ステレオタイプ (психический стереотип)」と言い換え、「心理構造 (психический склад)」の一種としている。プロムレイは「行動のステレオタイプ」の世代間継承に関するグミリョフの議論をステレオタイプ化された民族的性格の遺伝と捉え批判した。Там же. С. 53–54.

35 David G. Anderson, Sergei S. Alymov, and Dmitry V. Arzyutov, “Grounding Ethnos Theory,” in David. G. Anderson, Sergei. S. Alymov and Dmitry. V. Arzyutov, eds., *Life Histories of Ethnos Theory in Russia and Beyond* (Cambridge: Open Book Publishers, 2019), p. 7.

このため、「行動のステレオタイプ」は熱情性を始めとする「生物学的」要素に分類される傾向がある<sup>(36)</sup>。

しかし、既に述べたように「行動のステレオタイプ」の内容そのものは社会規範に関するものである。N. M. ドロシェンコと I. F. ケフェリが指摘するように、「行動のステレオタイプ」は民族学者としてのグミリョフの知見に由来するものだと考えられる。ドロシェンコらは、「行動のステレオタイプ」がグミリョフの民族学的な博識や多言語の知識、東方諸文化への造詣によってもたらされたものであると指摘している<sup>(37)</sup>。ネイティヴ・アメリカンやアフリカ人、モンゴル人、そしてロシア人をヨーロッパ人が野蛮と見ることに對して、同じ資格で英国人を野蛮と見做すことが出来るというグミリョフの主張にも、多文化への知識に由来する相対主義が表れていると言えるだろう。

また、グミリョフはある「行動のステレオタイプ」がその集団の成員にとっては唯一自然であり、それ以外の規範は全て野蛮とされると述べている。このことはあるエトノスの内部で自然と考えられる規範がそのコミュニティの外側では効力を持たないことを含意している。加えて、「行動のステレオタイプ」に関するグミリョフの見解に従えば、あるエトノスの「行動のステレオタイプ」とは異なる規範で行動する人物は、その集団の構成員たちから不自然・野蛮と見做されると考えることが可能である。このことは、たとえば言語、文化、人種の特徴などの点で同質性が高く客観的に見て相違のない人々の間でも、行動規範の観点からお互いを同胞として受け入れないケースが存在することを含意している。このように、グミリョフは特定の文化的・身体的指標に基づくエトノス定義を拒ける一方で「行動のステレオタイプ」と呼ばれる共同体ごとの規範をエトノスの要件としている。客観的同質性ではなく行動規範の差異から民族的帰属を捉えるグミリョフの議論は、次節で述べる特殊な民族理解と結びついていると考えられる。

### 3. エトノスの指示範囲の多層性

従来の研究では、グミリョフが特定の文化的・身体的特徴をエトノスを規定する要素から除外していることはあまり注目されて来なかった。アンダーソンらによれば、民族に関する「言語、伝統、生物学と結びついた伝統的な定義 (a traditional definition connected to language, traditions, and biology)」がグミリョフによるエトノス理論の核をなすという<sup>(38)</sup>。また E. A. シンガトゥリンは、社会関係や言語、民族意識の発生、そして地理的条件がグミリョフのエトノス理解にとって重要だったと主張する一方で、エトノスの形成における言語の

---

36 例えばチトフは、「行動のステレオタイプ」の変化が熱情性に由来するというグミリョフの主張が非任意主義的 (non-voluntary) な自然過程としてのエトノス理解を強調するものだとしている。Titov, "Lev Gumilev, Ethnogenesis and Eurasianism," p. 224.

37 *Дорошенко Н.М., Кефели И.Ф. Введение // Лев Гумилев: pro et contra / Под ред. Г.А. Бордовского, В.Н. Кичеджи, В.П. Соломина, Д.К. Бурлаки. СПб., 2012. С. 14–17.*

38 David G. Anderson, Sergei S. Alymov, and Dmitry V. Arzyutov, "Etnos Thinking in the Long Twentieth Century," in David. G. Anderson, Sergei. S. Alymov and Dmitry. V. Arzyutov, eds., *Life Histories of Etnos Theory in Russia and Beyond* (Cambridge: Open Book Publishers, 2019), p. 51.

重要性をゴミリョフが否定していることは註で触れるに留まっている<sup>(39)</sup>。これらの解釈はゴミリョフが特定の文化的・身体的特徴に基づくエトノス定義に反論していることを十分考慮に入れていないと考えられる。加えて、ゴミリョフのエトノス定義において強調される彼我の対置は無意識的・非合理的な仲間意識に関するゴミリョフの「生物学的」言説（相補性など<sup>(40)</sup>）に回収される傾向がある<sup>(41)</sup>。

これに対して、本節ではゴミリョフが主張した彼我の対置の原因に関する「生物学的」説明にではなく、彼我の対置が彼の民族理解において持つ機能上の意義に焦点を当てた分析を行う。特に、ゴミリョフのエトノス定義を帝政期の民族学者 S. M. シロコゴロフのエトノス定義と比較することを通してゴミリョフの民族理解の特殊性を明らかにする。従来の研究では、シロコゴロフとゴミリョフの議論はエトノスを生態学的に捉える点で共通するものとされてきた<sup>(42)</sup>。しかし、渡邊日日が指摘するように、両者の親和性はむしろエトノスを変化の過程（процесс）として捉える点にあると言える<sup>(43)</sup>。シロコゴロフによれば、民族単位とは集団の特徴を構成する要素（民族誌的諸要素）が変化する過程であるという<sup>(44)</sup>。また、ゴミリョフによればエトノスやスーパーエトノスは状態（состояние）ではなく過程であるという<sup>(45)</sup>。本節では、このように両者が特定の文化的・身体的その他の特徴から固定的にエトノスを規定しないことに着目しつつ、両者のエトノス定義の差異からゴミリョフの特殊性を検討する。

ゴミリョフは、行動規範の差異に基づく彼我の対置を強調することで、言語、文化、人種、領域といった指標を民族集団の境界を規定する上で二次的なものとしている。このことのために、彼が用いるエトノスという言葉は「言語、伝統、生物学と結びついた伝統的な定義」（アンダーソン、アリモフ、アルジュトフ）によって一般的にイメージされる民族の範囲を超えて使用されることとなった。例えば、ゴミリョフは多民族国家の住民全体を指してエトノスもしくはスーパーエトノスと呼ぶ場合がある。そのような事例として、ここでは彼の提示するローマ人概念を取り上げる。

39 E. A. Singatouline, “Redefining ethnos. Gumilev’s concept of ethnos,” *International Journal of Russian Studies*, no. 10 (2021), p. 84, 90.

40 相補性については註 13 を参照。

41 例えばシンガトゥリンは相補性を「特定のエトノス集団内部における人々の本能的な相互的シンパシー」とし、これが彼我の対置を形成すると説明している。Ibid., p. 82. 人間の集団形成能力における合理性では説明できない個人間の相互的なシンパシーについてはチトフも同様の説明をしている。Titov, “Lev Gumilev, Ethnogenesis and Eurasianism,” pp. 66–67.

42 Филиппов В.Р. С. Широкогоров: У истоков биосоциальной интерпретации этноса // Этнографическое обозрение. 2006. №3; Маибиц, Чистов. Ещё раз к вопросу о двух концепциях «этноса». С. 699–701; Арутюнян и др. Этносоциология. С. 33. ゴミリョフ自身、シロコゴロフと自分の共通性と差異については「生物学的」側面から考えていた。Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 82–83.

43 渡邊日日「ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防：ソビエト科学誌の為に」『国立民族学博物館調査報告』78巻、2008年、90頁。

44 セルゲイ・シロコゴロフ（川久保悌郎、田中克己訳）『北方ツングースの社会構成』岩波書店、1982年、10頁。

45 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 86, 177.

212年のカラカラ帝による勅令以降、ローマ人という言葉はローマ帝国領内の全自由人を指す呼称に変化した。この点についてグミリョフは、ローマ人という名称が民族的な意味(этническое значение)を失ったように見えるがそのようなことはなく、単に意味を変化させただけなのだと述べている<sup>(46)</sup>。つまり、どのような指標をもってローマ人とするのかという意味内容が変化しただけであり、多民族から成る帝国市民全体を指すようになってもローマ人という言葉自体は依然として民族的なものであり続けるというのである。

この場合に重要なのは、ある集団が自己を外部の集団と対置することであり、その集団が特定の文化的・身体的その他の特徴を共有しているかどうかは二次的な問題に過ぎないという点である。グミリョフによれば、カラカラ以降、起源や言語、文化の共通性ではなく史的運命(историческая судьба)<sup>(47)</sup>の一体性がローマ人を規定する特徴となった。この形態は3世紀ほど継続し、4-5世紀にキリスト教が国教化されると、今度はキリスト教の共有がローマ人の特徴となった<sup>(48)</sup>。ここではローマ・エトノスを規定する指標は、言語・文化・起源の共有から史的運命の共有へ、そしてキリスト教の共有へと移行している。既に述べたように、シロコゴロフはエトノスを変化の過程にあるものと捉えているが、こうしたグミリョフの見解はエトノスの範囲を規定する特徴の変化を認める点でシロコゴロフと共通するものと言える。

他方、もしエトノスの特徴が変遷し、ローマ人のように境界が移動し得るのならば、そのエトノスを特徴づける指標は「我々―彼ら」が対置されるレベルごとに規定し直されるものとなるだろう。その点、シロコゴロフはエトノスという語が一定の指示範囲から逸脱しないようにしている。彼はエトノスを次のように定義している。

種としての人類の文化的・身体的変化の過程が進行する単位がエトノスであり、エトノスには自身  
が起源、慣習、言語、生活様式の同一性によって統合された人間集団だと意識される<sup>(49)</sup>。

この定義に見られるように、シロコゴロフはエトノスの構成要素が変化すると考える一方で、エトノスを起源、慣習、言語、生活様式など一定の指標に沿った同一性で統合される人間集団だと考えている。

---

46 Там же. С. 87.

47 グミリョフによれば「出来事の内因論理によってさりげなく結び付けられた事象の鎖」を史的運命と呼び、また「史的運命は、ひょっとすると2つか3つの民族には同じで、1つの民族の内部で異なるかもしれない」という。Там же. С. 94, 669. ただし、この語もまたグミリョフの発明ではなく、トカレフも同じ語を使用している。「各民族は特定の領域にまとまっているものであるが、時に史的運命の力によって(в силу исторических судеб)民族は他の民族と混じって移住し、時に分離した他の部分との相互連絡を失う」。Токарев С.А. Введение // Основы этнографии / Под ред. С.А. Токарева. М., 1968. С. 9.

48 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 87-88.

49 «единицею, в которой протекают процессы культурного и соматического изменения человечества как вида, является этнос, осознаваемый им самим как группа людей объединенных единством происхождения, обычаев, языка и уклада жизни». Широкогоров С.М. Этнографические исследования Этнос. Исследование принципов изменения этнических и этнографических явлений. Владивосток. 2002. С. 133. 翻訳は渡邊「ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防」79頁を参照。

他方、グミリョフのエトノス定義には起源、慣習、言語、生活様式といった指標に関する文言は見られない<sup>(50)</sup>。さらに、前述の「行動のステレオタイプ」と併せて考えるならば、ここには次のような問題が存在する。すなわち、一人の人間が身に着け得る「行動のステレオタイプ」の数とそれに対応する「我々彼ら」の対置は複合的なものなので<sup>(51)</sup>、定義上の制限を設けなければ、行動規範に応じて大小多様な集団がエトノスと認められ得ることになる。結果として、ローマ人のように、グミリョフの議論においては多民族国家の住民全体がエトノスに数えられることともなった<sup>(52)</sup>。

シロコゴロフがエヴェンキなど参与観察の対象となる小規模な集団を主にイメージしていたのに対して、グミリョフのエトノス概念は言語や血縁などの共通性に基づく集団よりも広範な集団を指示し得る。そのため、グミリョフの定義においては、彼我の対置がなされ一定の行動規範を共有しているならば、信仰集団、身分集団、氏族連合、部族、部族連合、国民、文明圏、帝国市民といった諸概念もエトノスの要件を潜在的に満たし得ることになる<sup>(53)</sup>。後述するように、グミリョフはこれらの諸概念をサブエトノスからスーパーエトノスに至る民族ヒエラルキーへと分類するに至った。次節からは、この大小多様な集団を入れ子状にエトノスと捉えるグミリョフの民族階梯論を分析する。

#### 4. コンソルツィヤ、コンヴィクシヤ、サブエトノス

「はじめに」で述べたように、グミリョフはエトノスに5つのヒエラルキーがあると主張している。この民族階梯論の内、本節では下位構造（コンソルツィヤ、コンヴィクシヤ、サブエトノス）に関するグミリョフの記述を分析する。従来の研究においては、ヒエラルキーの上部構造であるスーパーエトノスが主たる考察対象となり、サブエトノス以下への言及

50 言語や文化などの指標を定義から排除する点は他の民族学者と比べた場合も大きな相違点であった。例えば、グミリョフの論敵プロムレイはエトノスを次のように定義している。「エトノスは（この用語の狭い意味では）特定の領域で歴史的に形成された人々の強固な集合体であり、共通の言語、文化、心理の比較的安定した特殊性を備えており、加えて自身の一体性と他の同様の組織との差異を認識し（自己意識を持ち）、それを自称（民族名）で表現するものと定義できるかもしれない」。Бромлей Ю.В. Этнические процессы как предмет исследования // Современные этнические процессы в СССР / Под ред. Ю.В. Броилей, И.С. Гурвича, В.И. Козлова, Л.Н. Терентьевы и К.В. Чистова. М., 1977. С. 12.

51 例えばグミリョフは、外国との関係においてはフランス人としてまとまる人々も、その内部では各人にとっての「自分の」と「自分のではない」集団があると述べている。Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 98.

52 他にもグミリョフは、歴史家たちは諸エトノスを文化、文明、世界と呼ばれる構造に分類してきたと述べている。また、グミリョフによればキリスト教世界やイスラム世界がそれぞれスーパーエトノスを構成しているという。Там же. С. 127, 175. つまり、文化圏や文明圏もエトノスの範疇に含め得るというのである。

53 グミリョフはナロード、ナロードノスチ、ナーツィヤ、プレーミヤ、氏族連合を皆エトノスと呼ぶとも述べている。Там же. С. 664.

は少ない<sup>(54)</sup>。バッシンによれば、コンソルツィヤとコンヴィクシヤはグミリョフの理論的枠組みの中で最も重要性が低く、これらについての議論は曖昧かつ不明瞭であるという<sup>(55)</sup>。しかし、本節で述べるようにグミリョフは両者について詳細な記述をしており、これらは彼の民族論を理解する上で不可欠な要素であると考えられる。

ヒエラルキー最下層に位置するコンソルツィヤとは「(短期間に) 特定の史的運命によって(しばしば一時的に) 結びつけられた個々人の集団」を指す<sup>(56)</sup>。グミリョフはコンソルツィヤをサークルやバンド、セクトであるとし、一例としてヴァイキングの徒党やモルモン教団、テンプル騎士団、仏教僧侶の組織、印象派などを挙げている<sup>(57)</sup>。他方、コンソルツィヤの一部には数世代にわたって集団が維持され、場合によっては血縁上の繋がりのできるものも存在する。グミリョフはこのような集団をコンヴィクシヤと呼び、「(民族ヒエラルキーの分類群で最下層にある) 性格を同じくする慣習と家族的繋がりを持つ個々人の集団」と定義している<sup>(58)</sup>。またグミリョフによれば、コンヴィクシヤはしばしばサブエトノスに成長する。グミリョフによれば、サブエトノスとは「エトノスの構造における要素として現れるエトノス・システム」または「エトノスの構造の要素で、他の要素と相互作用するもの」と定義される<sup>(59)</sup>。

コンソルツィヤがコンヴィクシヤを経てサブエトノスへと変化する例として、グミリョフはゼムリエプラホツィ(землепроходцы)<sup>(60)</sup>と古儀式派、ムハンマド時代のムスリム、ローマ帝国におけるキリスト教徒などを挙げている。グミリョフによれば、古儀式派はもともと古儀式派信仰者のコンソルツィヤとして成立し、第二世代以降にコンヴィクシヤとなり、19世紀にサブエトノスになった。また、ゼムリエプラホツィも元来は冒険家たちのコンソルツィヤであり、後にシベリア人の原型となった<sup>(61)</sup>。同様に、ローマ帝国におけるキリスト教信者のコンソルツィヤは第二世代でサブエトノスになったという<sup>(62)</sup>。またグミリョフによれば、出現当初の匈奴はサブエトノスを形成するには弱過ぎるコンソルツィヤだったという<sup>(63)</sup>。

54 Domitry Shlapentokh, “Lev Gumilev: The Ideologist of the Soviet Empire,” *History of European Ideas* 38, no. 3 (2012); Bassin, *The Gumilev Mystique*; Titov, “Lev Gumilev, Tthnogenesis and Eurasianism.”

55 Bassin, *The Gumilev Mystique*, pp. 62–63.

56 «Консорция—группа людей, объединенных одной исторической судьбой». «Консорция—группа людей, объединенных, часто эфемено, одной исторической судьбой на короткое время». *Гумилев. Этногенез и биосфера Земли*. С. 169, 694.

57 Там же. С. 136; *Гумилев. Конец и вновь начало*. С. 56, 71.

58 «Конвиксия—группа людей, объединенных однохарактерным бытом и семейными связями». «Конвиксия—группа людей, объединенных однохарактерным бытом и семейными связями, низший таксон этнической иерархии». *Гумилев. Этногенез и биосфера Земли*. С. 169, 694.

59 «Субэтнос—этническая система, являющаяся элементом структуры этноса». «Субэтнос—элемент структуры этноса, взаимодействующий с прочими». Там же. С. 169, 698.

60 東シベリア、極東などを探索した17世紀ロシアの探検家たち。

61 *Гумилев. Конец и вновь начало*. С.56–58; *Гумилев. Этногенез и биосфера Земли*. С. 136.

62 *Гумилев. Этногенез и биосфера Земли*. С. 183.

63 *Гумилев Л.Н. Хунну*. СПб., 1993. С. 38. この箇所は晩年にグミリョフが加筆したものであり、1960年の『匈奴』初版には対応する文章は存在しない。

その他にもグミリョフはサブエトノスの例として、ドン・コサックやクリャシェン、ポモール、コンキスタドル、ピューリタン、ユグノー、共産主義者などを挙げている<sup>(64)</sup>。またグミリョフによれば、サブエトノスは階級とは一致しない一方、しばしば身分(сословие)の形を取るともいう<sup>(65)</sup>。身分が独自のサブエトノスを形成する例として、グミリョフは18世紀のフランス化したロシア貴族を挙げている。グミリョフによれば、18世紀後半からロシア貴族の間で言語、慣習、好みなどの点でフランス的価値観が浸透し、サブエトノス・レベルで新たな「行動のステレオタイプ」が形成されたという<sup>(66)</sup>。

サブエトノスの構成員は独自の行動のステレオタイプを有し、慣習や感情表現の点で他集団と異なるともグミリョフは述べている<sup>(67)</sup>。その点、サブエトノスはエトノス定義の要件を満たしていると考えられる。実際、グミリョフの著作の中ではサブエトノスの定義に見られる「エトノス・システム(этническая система)」という語がエトノスの同義語であると述べられており<sup>(68)</sup>、この点からもサブエトノスがそれ自体で既にエトノスであることが窺える。グミリョフはサブエトノスがエトノスに変化する事例を複数紹介しているが<sup>(69)</sup>、これらの事例に見られるように、移民や国家独立などの理由によってサブエトノスは時に独立し、エトノスになる。

既に述べたように、グミリョフの民族理解は行動規範に基づく「我々―彼ら」の対置に依拠したものであり、後述するスーパーエトノスのようにマクロな単位だけでなく、コンソルツィヤ、コンヴィクシヤ、サブエトノスと呼ばれる諸集団をも民族的範疇に含める視座が存在した。この内、コンソルツィヤについての記述からは、信徒の集まりや冒険家の徒党を始めとする小規模な集団が状況次第ではエトノスの原型になり得るとグミリョフが考えていたことが窺える。実際、グミリョフがサブエトノスとして挙げる事例には信仰団体、盗賊・冒険家の徒党といった集団から派生したものも含まれている。またグミリョフはムスリムが元々はイスラム教信者のコンソルツィヤであったと言い、それがサブエトノスを経てエトノス、スーパーエトノスになったと叙述している<sup>(70)</sup>。

信徒の集まりや冒険集団、共産主義者、また身分集団などが場合によってはエトノスになり得るという上記のグミリョフの発想は、「言語、伝統、生物学と結びついた伝統的な定

64 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 99, 134–136; Гумилев. Конец и вновь начало. С. 57–58; Гумилев Л.Н., Ермолаев В.Ю. Горь от иллюзий // Ритмы Евразии: эпохи и цивилизации / Под ред. С.Б. Лаврова. М., 1993. С. 187.

65 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 135.

66 Там же. С. 134.

67 Там же. С. 135.

68 Словарь понятий и терминов теории этногенеза Л.Н. Гумилева // Этносфера / Под ред. Е.М. Гончарова. М., 1993. С. 536.

69 Гумирьовはゼムリエブラホッツィが移住先のシベリアでもロシア・エトノスに留まった一方、コンキスタドルやピューリタンはアメリカでエトノスに成ったと述べている。この場合、前者はロシア・エトノス傘下のサブエトノスに留まった一方、後者はもともとスペインやイギリスのエトノスに属するサブエトノスだったが独立してエトノスになったと言える。またグミリョフによれば、もし国家を建設していたならばユグノーはエトノスになっていたという。Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 100, 136.

70 Там же. С. 143–144.

義」に基づいて民族を捉える立場とは必ずしも一致しないと考えられる。加えて、民族階梯論の下位構造に関するグミリョフの記述において、行動規範の差異に基づく「我々」と「彼ら」の区別を生み出し新たなエトノスを発生させるのは、必ずしも熱情性のような「生物学的」要因ではなかった。むしろ、新たな文化の浸透や国家の独立、地理的隔絶などによって新たな行動規範が成立し、サブエトノス（エトノスと同義）が発生したりサブエトノスがエトノスに変化したりしていた。グミリョフはこうして生まれた諸集団をエトノスと呼び、熱情性を始めとする「生物学的」説明を施すことで、それらに民族的な運命共同体としての性質を付与していた。その点、シュニレルマンとパナーリンが指摘したグミリョフ言説を構成する2つのブロックは、必ずしも矛盾するものではなく、むしろ相互補完的に機能するものだと考えられる。

## 5. スーパーエトノス

スーパーエトノスについてグミリョフは複数の定義を残している。まず、「スーパーエトノスは、特定の景観地域で同時に発生した複数のエトノスから成るエトノス・システムであり、モザイク状の統一体として歴史上に現れた」という<sup>(71)</sup>。また「スーパーエトノスは、特定の地域に同時に発生した諸エトノスの集団であり、モザイク状の統一体として歴史上に現れた」ともグミリョフは記している<sup>(72)</sup>。加えて別の箇所では「特定の地域に同時に現れ、経済的、イデオロギー的、政治的一体性によって相互に結びつけられた諸エトノスの集団を我々はスーパーエトノスと呼ぶが、それらのエトノスの間での紛争を除外するものではない」とも述べられている<sup>(73)</sup>。以上の諸定義から言えるのは、グミリョフにとってスーパーエトノスとは特定の地域に居住する複数のエトノスからなるマクロな集団だということである。また、「エトノス・システム」という表現からもわかるように、グミリョフはスーパーエトノスを単なるエトノスの集合体としてのみならず、一個の民族単位としても捉えていたと考えられる。

既に述べたように、グミリョフは自身のエトノス定義において、エトノスは他のエトノスとの間で彼我を対置し、その構成員は「行動のステレオタイプ」を共有するとしている。エトノスの場合と同様に、スーパーエトノスも自己を他のスーパーエトノスに対置し、その構成員は一定の「行動のステレオタイプ」を共有する<sup>(74)</sup>。エトノス定義の要件を満たす「エトノス・システム」であり内部に下位集団を包摂する点で、スーパーエトノス、エトノス、

---

71 «Суперэтнос—этническая система, состоящая из нескольких этносов, возникших одновременно в одном ландшафтном регионе, проявляющаяся в истории как мозаичная целостность». Там же. С. 698.

72 «Суперэтнос—группа этносов, возникающих одновременно в одном регионе, и проявляющая себя в истории как мозаичная целостность». Там же. С. 169.

73 «Суперэтносом мы называем группу этносов, одновременно возникших в определенном регионе, взаимосвязанных экономическим, идеологическим и политическим общением, что отнюдь не исключает военных столкновений между ними». Там же. С. 137.

74 Там же. С. 104, 137.

サブエトノスの三概念は相似の関係にあると言える。その点、ゴメリヨフにとってはいずれの集団も基本的にはエトノスであり、「我々一彼ら」が対置されるレベルや包摂関係が異なるだけだと考えられる。

ただし、スーパーエトノスの規定要素には他に「支配的思想 (доминанта)」もしくは「民族の支配的思想 (этническая доминанта)」とゴメリヨフが呼ぶ要素が含まれる点で通常のエトノスとは異なる。ゴメリヨフによれば、支配的思想とは「民族発生過程においてまず存在する民族文化的な多様性が目的ある均一性へと移行するのを決定づける、(宗教、イデオロギー、戦争、慣習についての) 現象もしくは諸現象の集合体」と定義される<sup>(75)</sup>。ゴメリヨフはスーパーエトノス同士の融合の不可能性を支配的思想同士の背反から説明し、その際に支配的思想の例としてキリスト教、仏教、イスラム教を挙げている<sup>(76)</sup>。

スーパーエトノスの例として、ゴメリヨフはヨーロッパ、イスラム世界、中国、ロシア、ビザンツ、モンゴル、ユダヤ人などを挙げている。ゴメリヨフはスーパーエトノスがしばしば文化類型や文明、文化、世界と呼ばれたと言い、例えばイスラム世界というスーパーエトノスの枠内で、イスラム教に基づく統一性を維持しつつも、多様な集団の文化生活が花開いたと述べている<sup>(77)</sup>。実際、スーパーエトノスは複数の研究者から文明との類似点を指摘されている。例えば、乗松亨平はスーパーエトノスを文明圏として理解すればよいと述べている<sup>(78)</sup>。またバッシンによれば、文明と同様にスーパーエトノスはエスノ・ナショナルな紐帯よりも信念の共通性や根本的な価値観、そして共有された歴史的経験によって団結するマクロな集団であるという。ただし、同時にバッシンはハンチントンの文明概念に比べてゴメリヨフのスーパーエトノスは遥かに伸縮性のある (elastic) 概念だと指摘している<sup>(79)</sup>。

加えて、ゴメリヨフの議論においては、支配的思想を持つサブエトノスがスーパーエトノス形成に果たす役割が強調されている。支配的思想を持つサブエトノスとして、ゴメリヨフは二つのものを挙げている。第一のものはムスリムのサブエトノスであり、この場合の支配的思想はイスラム教である。ゴメリヨフによれば、このサブエトノスは元々イスラム教信者のコンソルツィヤであった。ムスリムのサブエトノスが全アラブを征服すると、アラブ人の「行動のステレオタイプ」はムスリムのものに変容し、新たなエトノスが生まれたとゴメリヨフは述べている<sup>(80)</sup>。ゴメリヨフはこのアラブ人によって形成されたスーパーエトノスをイスラム世界と呼んでおり、その中ではイスラム教という支配的思想の下で多様な文化生活が花開いた。

75 «Этническая доминанта—явление или комплекс явлений (религиозный, идеологический, военный, бытовой), который определяет переход начального для процесса этногенеза этнокультурного многообразия в целеустремленное единообразие». Там же. С. 184, 700.

76 Там же. С. 184; Гумилев, Ермолаев. Горе от иллюзий. С. 182.

77 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 126–127, 145, 175. ゴメリヨフによればユダヤ人は脱領域的なスーパーエトノスを形成しており、複数のエトノス内部に構成員を持つという。Гумилев Л.Н., Иванов К.П. Этнические процессы: два подхода к изучению // Ритмы Евразии: эпохи и цивилизации / Под ред. С.Б. Лаврова. М., 1993. С. 171.

78 乗松「『結びつけ』の空間」380頁。

79 Bassin, *The Gumilev Mystique*, pp. 69, 253–254.

80 Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 143.

第二のサブエトノスはローマ帝国におけるキリスト教徒のサブエトノスである。グミリョフによれば、キリスト教の行動様式がローマ帝国でヘゲモニーを握ると、正教キリスト教的な統一体が出現したという。5-10世紀にかけて正教世界のスーパーエトノスが形成される一方、1054年の教会分裂以降、カトリック教会を中心に西欧のスーパーエトノス「キリスト教世界」が分岐したとグミリョフは述べている。グミリョフによれば、キリスト教はヘレニズム文化にとって異質な「民族学的、すなわち行動上の（этнологический, т. е. поведенческий）」特徴をなすものであったという<sup>(81)</sup>。グミリョフによれば、キリスト教徒のコンソルツィヤは多様なエトノスの出身者から構成されており、第二世代で既に「ヘテロ結合だが一枚岩の（гетерозиготный, но монолитный）」サブエトノスを形成していたという<sup>(82)</sup>。

キリスト教徒のサブエトノスに関するグミリョフの記述で注目すべきなのは、アウグスティヌスのようなキリスト教思想家が言うかもしれないとグミリョフが述べている疑問である。それは次のようなものである。

ガリア人やエジプト人、アフリカ人やフン人、ヒスパニア人やシリア人をローマ市民にしたとして、かくも多民族な大衆が彼らを征服したローマの利害に忠実であるとして如何にして期待できるだろうか？<sup>(83)</sup>

これに対してグミリョフは、多民族な帝国市民の間にキリスト教が連帯感をもたらしたとし、その理由としてキリスト教徒の間では人種的な差異が決定的な意味を持たず、代わりに行動面の差異が問題とされたことを挙げている。この箇所からは、多様な民族的背景を持つスーパーエトノス構成員を統合する上で、特定エトノスの枠組みを超えた支配的思想が必要だという考えを読み取ることができる。特に、ムスリムやキリスト教徒から成るサブエトノスの例に見られるように、支配的思想を持つサブエトノスが帝国の諸民族から構成員を集め、多様なエトノスをスーパーエトノスへ統合したとグミリョフは考えていた<sup>(84)</sup>。

支配的思想を持つサブエトノスが活躍したのがローマ帝国などであることからわかるように、グミリョフの著作の中では文明圏とは異なる帝國的な国家やそれに類する巨大な政体、またその住民全体としての意味でスーパーエトノスという言葉が用いられる場合がある。例えば、グミリョフはバトウの征西によって北東ルーシがモンゴルのスーパーエトノスに入っ

---

81 Там же. С. 140-141. イエス・キリストという例外を除いて、ギリシア人やローマ人はミトラ、イシス、キュベレイ、ヘリオスといった異教の神々とは争わなかったとグミリョフは指摘している。 Там же. С. 140. 確かにキリスト教信仰はそれまでの多神信仰とは異なる行動様式を求める点で、従来のヘレニズム世界とは異質な「行動のステレオタイプ」に基づいていると言えるだろう。

82 Там же. С. 183.

83 Там же. С. 182.

84 ただし、グミリョフによる支配的思想の定義は宗教以外の思想も含み得るものであり、支配的思想は必ずしも宗教に限定されないと考えられる。晩年に書かれた著作において、グミリョフはソ連をスーパーエトノスであると述べ、共産主義者を「様々なエトノス出身者からなる明確な周縁的サブエトノス」と規定している。 Гумилев, Ермолаев. Горь от иллюзий. С.183, 187. キリスト教徒とのアナロジーで言えば、グミリョフはソ連における共産主義者は共産主義という支配的思想を持つ「ヘテロ結合だが、一枚岩の」サブエトノスだと考えていたと言えるだろう。

たと考え、またモンゴル・ウルスをスーパーエトノスと言い換えている<sup>(85)</sup>。加えて、晩年のグミリョフはソ連とロシア帝国をスーパーエトノスと呼んでいる<sup>(86)</sup>。このように、グミリョフが使うスーパーエトノスという言葉には文明の通用する領域のみならず文明的性格を持つ巨大国家を指す用法も存在する<sup>(87)</sup>。

グミリョフは巨大国家をスーパーエトノスと見做すことで、その国家や住民全体に民族的性質を付与してもいる。同じ民族概念でも、ソ連においてナーツィヤ (нация) は、史的唯物論の観点から、社会が資本主義および社会主義の段階にある時点で形成される一時的な存在とされていた<sup>(88)</sup>。一方、エトノスは歴史段階に関係なく存在するものと捉えられており、エトノスという呼称は原初主義的な民族理解と結びついていた<sup>(89)</sup>。その意味において、グミリョフの理論はある国家領域に住む住民全体を一つの民族として本質化する可能性をもつものでもあった。例えば彼は「我々のスーパーエトノス (наш суперэтнос)」がかつてはロシア帝国、次にソ連と呼ばれたと述べているが<sup>(90)</sup>、ロシア史をテーマとした著作においてグミリョフはソ連という既存の国家領域を「我々のスーパーエトノス」と捉え、その発生から現在に至る歴史的系譜を説明しようとしていた<sup>(91)</sup>。

こうしたグミリョフの姿勢は、ソ連やロシア帝国、あるいはユーラシア (Евразия) といった広域的単位をエトノスと見做し、その「民族史」を叙述することを理論的観点から正当化する機能を果たすとも考えられる<sup>(92)</sup>。主著のタイトルにも見られるように、グミリョフは

85 Гумилев. От Руси к России. С. 139, 216.

86 Гумилев, Ермолаев. Горь от иллюзий. С. 183. また、別の箇所ではグミリョフは、ロシアのスーパーエトノス (российский суперэтнос) を現在はソヴィエト人 (советский народ) であると言い換えている。Гумилев Л.Н. Письмо в редакцию «вопросов философии» // Вопросы философии. 1989. №5. С. 159. ソ連とソヴィエト人は国家とその国民という別概念であるが、グミリョフは両者をともにスーパーエトノスと呼び厳密な区別をしていない。

87 グミリョフは国家的帰属と民族的帰属を分けているものの、国家の枠組みがエトノス構成員の意識する「我々」と「彼ら」の境界と重なるケースを認めていた (ローマ人やユグノーについての記述など)。

88 井上紘一「ナーツィヤ」『世界民族問題事典』平凡社、1995年、618頁。

89 Anderson, Alymov and Arzyutov, “Grounding Ethnos Theory,” p. 14.

90 Гумилев, Ермолаев. Горь от иллюзий. С.183.

91 グミリョフはロシア史をキエフ・ルーシ時代 (9-13世紀、ノヴゴロドのみ15世紀まで) とモスクワ・ルーシ (ロシア) 時代 (13世紀-現在) の二つに分け、モンゴル統治下で形成された後者が現在、すなわちソ連末期まで続いているとしている。グミリョフによれば、モスクワはキエフ・ルーシの伝統を破壊し、これをモンゴルから借用した行動規範に変えたという。Гумилев. От Руси к России. С. 218, 482, 485. この記述において、ロシアの行動規範、すなわち「行動のステレオタイプ」はモンゴル帝国から継承されたことになっている。また、グミリョフによれば、ユーラシアという言葉は大陸としてのみ理解されるものではなく、その中心で形成されたスーパーエトノスをもこの名で呼ぶという。そう述べた上でグミリョフは、この大陸は突厥、モンゴル、そして両者の後継者たるロシアによって歴史上3回統一されたと述べた。Там же. С. 491.

92 こうした系譜上の連続性が可能なのは、そもそもグミリョフのエトノス定義が集団を規定する特徴の通時的な変化を許容するものだからだと考えられる。また、グミリョフは「私たちの子孫 (наши потомки)」について「私たちが多少似ていないかもしれないが (хотя и немного не похожие на нас)」と述べている。Там же. С. 481. 間接的とはいえ、集団を規定する特徴の通時的な変化について未来にも言及する点でグミリョフは徹底していた。

「エトノス生成 (этногенез)」という用語に頻繁に言及していた。この語は元々 1930 年代に始まるソ連民族学の分野を指し、ソ連国内諸民族の起源を通史的に遡ることで民族史を構築するジャンルだった。同様に、グミリョフはユーラシア主義的観点から「我々のスーパーエトノス」たるソ連 (ソヴィエト人) の民族的起源 (этногенез) をも論じたと考えられる<sup>93)</sup>。

## おわりに

従来のグミリョフ研究においては熱情性を始めとする「生物学的」要素が主に注目され、彼の議論は疑似科学を援用して民族を原初主義的に捉えるものとされてきた。他方、エトノス定義に注目する本稿のアプローチから明らかなように、グミリョフは行動規範の差異に基づく「我々ー彼ら」の境界を重視していた。この時、同じくロシアの民族学者であるシロコゴロフとは異なり、グミリョフはエトノス定義から文化的・身体的その他の指標を完全に除外している。その結果として、エトノスの要件を満たし得る集団は「言語、伝統、生物学と結びついた伝統的な定義」によって規定される範囲を超えて広がることとなった。グミリョフは民族的帰属の多層性をヒエラルキー状に捉え、コンソルツィヤ、コンヴィクシヤ、サブエトノス、エトノス、スーパーエトノスに至る民族階梯論を唱えた。

民族階梯論については、本稿から以下の事柄が明らかとなった。従来の研究においてコンソルツィヤ、コンヴィクシヤ、サブエトノスはあまり注目されてこなかったが、本稿で見えてきたように、これらの概念からは、場合によっては信者の集まりを始めとする小規模な集団 (コンソルツィヤ) や身分団体に遡行して民族の発生を論じるグミリョフの姿勢が窺える。また、スーパーエトノスはこれまで主に文明論の観点から考察されてきたものの、同時に帝國的な国家やその住民全体を含め、多様な民族を包摂する集合体の構造を概念的に把握するものでもあった。グミリョフによれば、ムスリムやキリスト教徒など普遍的価値観を行動原理とする集団がスーパーエトノス内部で多様な共同体を統合する核となっていた。加えて、ソ連のような特定の国家領域をスーパーエトノスと呼ぶことで、グミリョフはその住民全体を一個の民族とも見做していた。

また民族階梯論下位構造の考察で見られたように、個別事例に関する彼の記述においては、文化の普及や移民、政治的独立といった現実的要因によって新たな「行動のステレオタイプ」が発生することで、他者と区別される集団 (エトノス) の出現が語られていた。しかし同時に、エトノス定義に見られるように、グミリョフにとってこれらの集団はあくまで「自

---

93 特定国家の住民全体を一個の民族と捉え、民族学、歴史学、生態学、考古学などの知見を援用しつつその集団の系譜を叙述する点で、グミリョフの議論は中国の人類学者・費孝通の中華民族論と類似している。費は中華民族を「現在の中国の国境内にあって、民族としてのアイデンティティをもつ 11 億の人民」と定義し、漢族を中心とした諸民族から成る多元一体の構造と考えた。費孝通 (西澤治彦訳) 『中華民族の多元一体構造』費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年、13 頁。費の中華民族論については、瀬川昌久「はじめに」瀬川昌久編著『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂、2012 年。

然に形成された(естественно сложившийся)人間集団でなければならなかった<sup>(94)</sup>。そのため、グミリョフは熱情性に代表される自然科学的議論を駆使し、エトノスと認定した諸集団に民族らしい「生物学的」根拠を提供したのである。その点、シュニレルマンとパナーリンが指摘したグミリョフ言説を構成する2つのブロックは、必ずしも矛盾するものではなく、むしろ相互補完的に機能していたと考えられる。この二元的なグミリョフのエトノス理論は各集団が自身を単なる社会集団ではない歴史的な運命共同体だと主張するのに都合のよい「科学的」言説でもあった<sup>(95)</sup>。結果的として、グミリョフのエトノス理論は、ユーラシア主義から個別の民族主義に至る多様な立場を正当化するために利用されることとなったのである<sup>(96)</sup>。

[付記] 本稿の執筆に際しては JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けた。

94 グミリョフはゲゼルシャフトの出現以前から存在する原初的共同体が徐々に発展したものがエトノスであるとも述べている。Гумилев. Конец и вновь начало. С. 39–40.

95 シュニレルマンによれば、グミリョフのエトノス理論は民族を生物学的存在と説明することでエスノ・ナショナリズムに疑似科学的論拠を提供した。また、内容面での矛盾や不一致のために、彼の議論は任意の民族主義によって都合よく解釈されたという。Шнирельман В.А. Лев Гумилев: от “пассионарного напряжения” до “несовместности культур” // Этнографическое обозрение. 2006. №3. С. 12.

96 例えば、M. ファブリカントによれば、ロシア国境外の全ロシア語話者をロシア文明の一員と捉える「ロシア世界 (русский мир)」思想のイデオロギーのみならず、これに対抗して勃興したロシア語話者主体のベラルーシ民族主義者も共にグミリョフのエトノス理論を論拠としているという。Marharyth Fabrykant, “Russian-speaking Belarussian Nationalism: An Ethnolinguistic Identity without a Language?” *Europe-Asia Studies* 71, no. 1 (2019).

## L. N. Gumilev's Definition and Hierarchical Understanding of *Etnos*

MISU Hiroaki

L. N. Gumilev is a Soviet historian and ethnologist, known as a tragic scholar who spent 14 years in labor camps. He is thought to have a primordialist view of *etnos*, considering it to be a biological entity. He believed that *etnos* is formed by *passionarnosti*, and many Gumilev scholars have focused on this pseudoscientific concept. In Soviet ethnology, whose main subject was *etnos*, Gumilev's position represented the "biological" ethnic theory, which was in opposition to the "social" ethnic theory of his opponent, Iu. V. Bromlei, the then director of the Institute of Ethnography. In this context, Gumilev's view of *etnos* was criticized as biologizing ethnicity and paving the way for racism.

However, little attention has been paid to the other aspects of Gumilev's argument that are not necessarily biological. In this paper, I will clarify Gumilev's non-biological view of *etnos* and the theoretical functions it serves, as it has not received sufficient attention in previous studies. The analysis of his argument on the definition of *etnos* makes it clear that Gumilev rejected the view of *etnos* in terms of linguistic, cultural, physical, and other fixed characteristics, and defined *etnos* on the basis of an us-them distinction that emerges through differences in common norms of behavior. By defining *etnos* in this way, he classified a wide range of diverse groups as *etnos*. Gumilev viewed these multiple *etnoses* as a hierarchical structure, from *konsortsiiia*, *konviksiia*, *subetnos*, *etnos*, to *superetnos*.

*Konsortsiiia* and *konviksiia*, which constitute the lower levels in Gumilev's theory of ethnic hierarchy, well represent Gumilev's basic thoughts about the emergence of ethnic groups by tracing them back to small circles, including religious ones, communist, and bandit circles such as Vikings or *Zemleprokhodtsy*. On the other hand, the *superetnos*, which Gumilev posited as the highest rung of the ethnic ladder, denotes not only a civilization but also a political entity, such as an imperial state and its entire peoples. Within the *superetnos*, according to Gumilev, *subetnos* such as Muslims and Christians, whose norms of behavior were based on universal values, played the role of the nucleus that united diverse communities. Gumilev, who called a particular state, such as the Soviet Union, a *superetnos*, regarded its entire population itself as a single *etnos*, that is, a kind of ethnicity. This way of thinking is related to his attempt to construct the history of an existing huge multiethnic nation, such as the USSR, from the perspective of the genesis of an ethnic system and its historical development.

He also discussed the genesis of *etnos* through the emergence of new norms of behavior due to contingent events such as cultural diffusion, immigration, and political independence. At the same time, however, for Gumilev, these groups had to be organically formed human groups. To this end, Gumilev used the pseudoscientific arguments represented by the *passionarnosti* to provide a "biological" basis for the various *etnoses*. This theory of *etnos* provided a scientifically disguised explanation for each circle to claim itself as a historically formed organic community, not just a mere functional group. As a result, Gumilev's ethnic theory was used to justify a variety of ideologies, from Eurasianism to the nationalism of each nation.